

ぼくは、たずねました。

「お父^{とう}さん、何^{なに}が起^おこったの？」

お父^{とう}さんはぼくを見^みて、

こ^いう言^いいました。

「戦^{せん}争^{そう}が始^{はじ}まったんだ……」

お父^{とう}さんはす^すぐに支^{した}度^{たく}をし^して、

おばあちゃんといっしょに村^{むら}へ避^ひ難^{なん}

しま^した。

お母^{かあ}さんとぼくは地^ち下^か室^{しつ}へにげこ

み、そこ^{みず}に水^みやす^すぐにく^くさ^さら^らない食^た

べ物^{もの}、背^せた^たけが低^{ひく}いテレ^てビ、オツ^おト

マン（足^{あし}を置^おいてくつろぐた^ための家^か具^ぐ）、

毛^{もう}布^ふなど^{はこ}を運^{はこ}びま^した。



戦争が始まり、ロシア語やロシア文学などの授業はなくなりました。

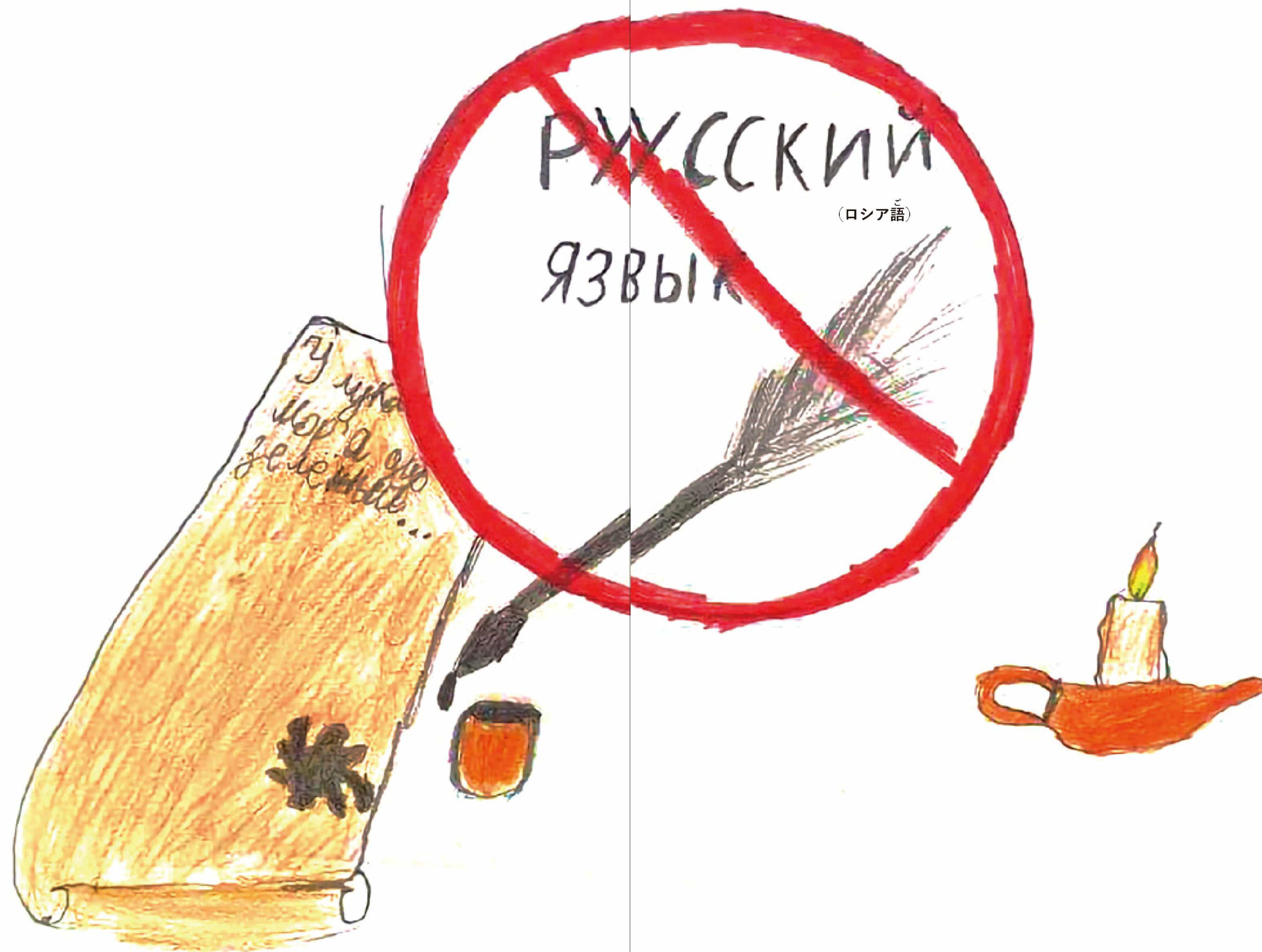
ぼくの母語（子どものころ、自然に身についた言葉）はロシア語で、以前は家でも学校でも、ロシア語とウクライナ語を両方、話していました。

おばあちゃん（おばあちゃんはロシア語しか話せない）の村に行くとき以外、ぼくはロシア語を話しているのか、ウクライナ語を話しているのか気づかないぐらいでした。

でも、今はウクライナ語しか話しません。

クラスメイトのフリホリー君は、今でもロシア語で話しかけてきます。「ダニール君が、ウクライナ語を話している！」

フリホリー君は笑いながら、ぼくをこのようにかからいます。



㊦㊧——図書館にはウクライナを代表する詩人タラス・シャフチェンコの本が並ぶ（クロブヴニツキー）。

㊦㊧——「わたしたちはウクライナ語を読みます」と書いてある（クロブヴニツキー）。



はかいがっこう
破壊されてしまった学校（ザポリージャ）。